

「三島由紀夫展—「肉体」という second language」の 実施報告について

1 開催期間：2020年1月18日（土）～3月1日（日）

※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため会期を短縮。当初予定は3月22日（日）まで

2 観覧者数：4,172人／38日間（当初予定は55日間）

3 開催報告

東京2020オリンピック・パラリンピックと関連付け、1964年の東京オリンピックで新聞社の特派記者として開会式や各競技のレポートを書いた三島由紀夫を取り上げた。

本展では、「肉体」をキーワードとして、虚弱体質だった幼少期、30歳からボディビルを開始して肉体改造に取り組み、死に至るまでの三島の人生と作品に迫った。没後50年を迎える機会に、三島作品を読み解く新たな視点を提示し、再読を促すきっかけを作ることができた。また、メインビジュアルに細江英公氏の『薔薇刑』の作品を用い、これまでの文学館にないデザインのポスター・チラシとしたことで、注目度が高く来館につながった。

（1）関連事業

開催したイベントはいずれも好評で、特に三島と親交のあった詩人・高橋睦郎氏をお招きした講演会は、参加者からの意欲的な質問も相次ぎ、三島の人物像や作品についての理解を深める機会となった。また、ギャラリートークの参加者数は初回から30人を超え、熱心に聞いていただいた。

事業名	開催日	参加者数
講演会 ①高橋睦郎氏	1月26日（日）	143人
②佐藤秀明氏	2月15日（土）	73人
藤田三男氏トークイベント	3月8日（日）	中止
朗読会 阿南京子氏	2月24日（月）	47人
映画上映会 ①「炎上」	2月9日（日）	中止
②「剣」	3月1日（日）	中止
展示解説（全3回）	1月25日（土）、2月11日（火・祝） ※3月22日（日）は中止	延べ77人

(2) 資料

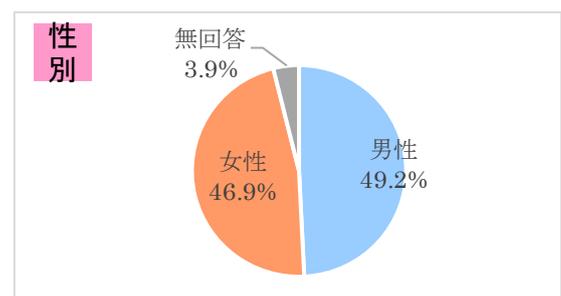
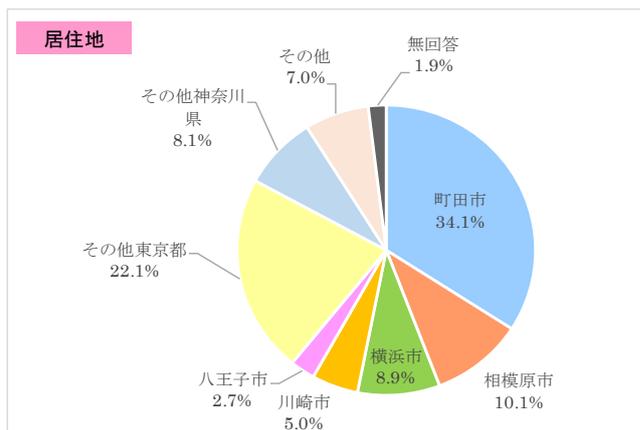
山中湖文学の森・三島由紀夫文学館の全面的なご協力により、自筆原稿や雑誌、ポスター等約 160 点を展示した。

(3) パブリシティ

- ・ 東京新聞に有料広告を出したほか、朝日新聞、産経新聞、神奈川新聞等に情報が掲載された。特に、都政新報では「美しい言葉の迷宮へ」と題した、展示の詳細な内容を紹介する記事が掲載された。
- ・ チラシミュージアム（全国の展示施設のチラシを閲覧でき、閲覧数によって表示順が変動するアプリ）では上位に入り、注目を集めた。

(4) 来館者アンケートから

- ・ 本展の特徴としては、市外からの来館者が 66%と比較的多く、また男女比において、通常の展覧会では女性が 6 割から 7 割を占めるなか、男性が 5 割を占めている。



- ・ 来館者の感想は以下のとおり
 - ▶ 肉体というひとつの軸を通して、全キャリアを俯瞰でき、とても分かりやすかった。知っているつもりのこと、あるいはその意味するところ、たくさん発見があり、久しぶりに作品を読み直したくなりました。(60代)
 - ▶ 本人の直筆の原稿の文字の美しさにほれぼれしました。美しさに対する激しい渴望が伝わって来て痛々しささえ感じました。(60代)
 - ▶ チャレンジしている、意欲的、三島と現代をとり囲んでいる重層的なわからなさに素直に取り組んだ企画力。(50代)
 - ▶ 三島の五輪の記事ははじめて読みました。文体に現場の熱、躍動する精神が感じられ、とても興味深かったです。(30代)